

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 児倉 徳和

『シベ語のアスペクト・モダリティの研究—知識状態の変化にもとづく体系化—』は、新疆ウイグル自治区で話されるシベ語の述語が表す複雑で多様な意味を、述語を構成するアスペクト接辞、モダリティ語尾、補助動詞それぞれの機能から導こうとする試みである。

第1章でシベ語の主な特徴を説明した後、第2章では、李樹蘭ほかによる記述を丹念に紹介し、問題点を指摘するとともに、本論文が採用する、話者の記憶領域に「知識データベース（長期記憶）」と「バッファ（短期記憶）」を仮定する記述の枠組みが導入される。話者の知識状態の変化に注目し、知識状態の変化には、(1) 新しい知識の書き込み（バッファに仮置きされたあとで知識データベースに書き込まれる）、(2) すでに知識データベースにある知識のバッファへの読み出し、(3) 矛盾する知識の削除（バッファに仮置きされた知識が知識データベースから読み出された知識と比較され、矛盾する知識が削除される）、という3種類があると仮定した上で、シベ語のモダリティ語尾と補助動詞は、知識状態の変化を表す形式であるという前提の下、それぞれの意味・機能を明らかにする、という見通しが示される。

第3章では、*-Xe*, *-maxe*, *-re* という3つのアスペクト接辞の意味・機能が、それぞれ、現実・完了、現実・未完了、非現実を表すと分析されるとともに、アスペクト接辞の表す意味・機能は命題に含まれることが示される。

第4章以降では、第3章までの内容を前提として本論文独自の分析が展開される。まず第4章では、完了形のアスペクト接辞に後続する *=i*, *=ŋe*, *=ø* (ゼロ形態) という3つのモダリティ語尾の意味・機能が明らかにされる。具体的には、*=i* は知識データベースへの新たな知識の書き込みの指示、*=ŋe* は知識データベースにある既存の知識のバッファ領域への読み出しの指示、そして、*=ø* (ゼロ形態) は知識データベースとバッファ領域の双方に状態変化がないことを表すことが、豊富な用例により示される。

第5章では、完了形以外のアスペクト接辞にモダリティ語尾が後続する場合を検討し、組み合わせに制約があるものの、第4章の結論が適用できることが示される。

第6章は、モダリティ語尾とイントネーションとの関係の考察に、第7章は、非述語用法に現れる *=ŋe* とゼロ形態の考察に割かれる。

第8章では、既存の知識と矛盾する新たな知識が与えられた場合の対応の違いに注目し、3つの補助動詞の違いが示される。*o-* は互いに矛盾する知識の両方の改変を、*yela-* はその一方だけの改変を、そして、*bi-* は矛盾する知識の一方の削除を表すことが明らかにされる。

執筆者自らが集めた豊富な用例に基づき、平叙文だけでなく、さまざまなタイプの疑問文までを対象とし、包括的で一貫した記述を試みた点は、本論文の大きな貢献である。一方、仮定や前提の多い枠組みが採用されているため、一部に記述の妥当性を確認することが困難な部分があることも事実である。また、難解な文体も理解を妨げる要因となっている。とは言え、シベ語の述語形式の、これまでで最も詳細な記述であることは明らかであり、今後、この分野において、本論文の水準を超える研究は、容易には現れないであろう。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値するものと判断する。